

ヒトラー内閣成立の真相

今中，次磨

<https://doi.org/10.15017/14508>

出版情報：法政研究. 3 (2), pp. 1-72, 1933-03-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

ヒトラー内閣成立の真相

今
中
次
磨

目次

一 緒言

二 一月三十日政變に對する各種の見解

三 一月三十日政變の經過

四 十二月四日シュライヘル内閣成立の事情

五 政局に現はれた諸勢力の關係

六 結論

一、緒言

資本主義の末期的現象の政治的反映として、ここに再び官僚及び軍閥の政治的指導が盛になつてゆく。それが如何なる傾向を以つて發展し、またいかなる政治的内容を有してゐるかを少しく詳細に分析して見たいと思ふ。そしてそのために去る一月三十日に成立せるドイツのヒトラー内閣の組閣に至るまでの經過は、實によき一つの資料を提供してゐると思はれる。

故に本論の主旨は歴史的に、事實の過程を明にすることにあり、むしろその歴史的過程から、一つの政治的理論を發見しやうとするにある。すなはちファシズム政權發展の一般的過程を見出さうとするにある。但しここに見出さるべき所謂ファシズム政權發展の一般的過程は、ドイツと同じやうな、又はドイツに類似せる社會的基礎を有する政治的環境に對してのみ類推さるべきである云ふ制約の下に於てのみ考へ得られるものであることを、豫め附言して置かねばならない。

次に官僚及び軍閥云ふ觀念について、未だそれが言はれてゐるほど明確なものこそせられてゐないが故に、一言説明して置く必要がある。

一、官僚 (Bürokratie) は軍閥に等しく、封建制度崩壞の跡に現はれてきた民族統一中央集權專制君主政治 (Absolute Monarchie) の時代、すなはち近代的商業資本 (Moderne Handelskapital) の時代であり、民族主義 (Nationalismus) の時代に於て、初めて出現した『政治的等族』 (Politischer Stand) の一つであるが、ドイツでは "Geheimrat" や "Staatsrat" ならに、最も尖鋭に表現してゐるところの、直接に政權の運営に參與し、これを指導しつつある政治及び行政上の機關層の黨閥である。

官僚はかやうに近代的な社會層であるが、その政治的勢力は、封建的な遺傳に基くものであることを否認し得ない。何んとなれば、Geheimrat にしても、Staatsrat にしても、封建的殘存勢力を統制するために、中央集權の政策として設置せられたものであつて、これによつて中央集權後の新政權は、封建的分散的勢力に抗爭し、これを制禦し得たものであつたからである。

しかしこの官僚的勢力は、立憲政治確立の後も憲法的に、又は事實的に殘存して、一つの政治的勢力をなしてきてゐたのである。たゞ政黨政治の發達に伴ふて、次第にその勢力は衰頹しつつあつた。

かやうな意味で官僚は、封建的大土地所有制に結びつき、都市的勢力よりも、むしろ農村大地的勢力、すなはち貴族的勢力に結びついてゐたわけであつて、その意味でもつゝ後次的な勢力、すなはち主として産業資本家

や金融資本家の勢力を、より著しい背景としてゐる議會的立憲的政黨よりも、保守的な又は守舊的な傾向を有してゐるを見られるのである。

最近に至つて、各種立憲國家内に、再び官僚的勢力について云々せられるやうになつた理由は、政黨勢力の衰頹も一つの原因であるが、またこの資本主義の末期的な動搖をうけて、農村大土地所有制そのものが政治問題化せられてきた結果である。現にドイツ現政局の痛みなつてゐるプロシア東部諸州への植民問題すなはち『東方匡救問題』(Oschille)のこゝきは、官僚的勢力の動きと密接な交渉を有してゐるものである。

二、軍閥(Militarismus)も亦、官僚と同じやうに近代民族中央集權國家の成立に伴ふて發生し、商業資本及び民族主義の時代を代表する一つの政治的勢力であつた。

軍閥は本來、右の時代に傭兵制度又は武士等族制度が撤廢せられ、それに代つて統一國民皆兵主義の軍制が確立せらるべき必要が生じた結果として、生れ出た政治上の黨閥である。最初はかやうな新しい訓練を有する統一的な國軍の創設に、直接に干與せる軍部の重要人物を中心として結成された事實的な勢力であつた。

しかしその後、に於てドイツのやうに、民主主義的革命を経た國家に於ては、むしろ新民主主義運動から自立した武力を創設しやうとする努力のうちに、軍閥的勢力が結成されたを考へねばならない。本論に於て軍閥を云ふ

のは、この種のものである。

軍閥も亦、立憲的議會政黨の勃興と共に次第に衰頹しつつあつたのであるが、今日再びこれが政治の表面に現はれてきた云ふことは、國際戰爭の必要が、さくに高まつてきた云ふことは、更に中産的社會層一般の窮乏が著しくなつた云ふことの二つの原因に、主として基いてゐると思はれる。

二、一月三十日政變に對する各種の見解

一月三十日の政變は、所謂ヒトラー内閣成立の政變である。

この政變の意義については、少くも二つの見解が立ち得る。一はシュライヘルが敗れて、遂にヒトラーがドイツ政權を奪取した云ふ見解であり、他はすなはち、ヒトラーが名目上は宿年の望だつたドイツ宰相の位置にはついたが、一方には前宰相バアペンの監視附であると共に、他方ではフーゲンベルグの經濟農業相としての政策的核心を掌握せるものがあり、果してヒトラーの勝利云ひ得るか云ふ見解である。

尤も第一の見解は、通俗的な素人的觀察であつて、この政變發展の過程を細かく追跡すれば、それが全く探るに足らない見解である云ふことが明にされるのである。*

従つておのづから第二の見解に歸着するのであるが、その理由は上に擧げたのみではなく、詳しくこの政變の發展過程を調べれば、おのづから明にされるのである。本論文はむしろこの點を明確にするために書かれたミ云つてよいのである。

しからばこの政變に於て、實際に勝利を占めたミ云はれ得る者は誰であるか？ それはバアペンであるか、フーゲンベルグであるか、或はまたシュライヘルであるか、ミ云ふミ云が、實に本論文の核心を構成するのである。

米 我が三月號雜誌及び當時のわが新聞紙に現はれた論評（但し東京朝日の論評は、第二の見解を少くにははしてゐた）の多くがこの説を代表してゐる。ロンドンのエコノミストにも同じ論評が現はれてゐた。（Economist, Feb. 4, 1933, P.238.）

第二の見解に立つて見るに、したがつてまたおのづから、種々の見解が存し得るのである。

其一、『ハルツブルク戦線』（Harzburg Front）の勝利を見るもの。これはヒトラア・フーゲンベルグ・ゼルの勝利ミ云ふミ云と同じものであつて第一の見解に最も近く、且つ最も一般的に説かれてゐる最も通俗的な見解である。この見解は決して間違つてゐるミは思はないが、今度の政變の勝利者は、それだけではない、その背後にひそむ眞の勝利者を私共は發見する必要があるミ思ふのである。

其二、英國の『エコノミスト』誌に現はれ、『前進』紙（Vorwärts）の反駁してゐる見解であるが、それはフ

ーゲンベルグミ彼の黨を支持するプロシアの封建貴族ユンカア (Junker) を中心とする官僚の陰謀であるを見るものである。

すなはち二月八日附『前進』紙によれば、二月四日の『エコノミスト』誌は、フーゲンベルグの新内閣に於ける地位を重要視し、この政變はユンカアの策謀の成功だに見てゐる。すなはちドイツ最近の政權は常に『東方匡救問題』の解決難によつて瓦壞してゐるが、それは現代の社會的混亂のうちにあつて、行詰れるプロシアの封建的大地主階層の破産的狀態ミ、その土地を適當に處分することによつて、この人口稀薄な地方に、過剩失業問題の解決を求めやうミ云ふ政策について、常に地主の負債救済問題ミ失業解決問題ミが衝突を來して圓滑な解決を齎らすことができないのである。その間にあつてバアペン内閣時代に於ける『東方匡救』費が、不當に右翼民族諸政黨の黨費に流れ込んだミ云ふやうな事實も指摘せられるやうになつた。今回の政變は、シュライヘル内閣時代議會に於て、この東方匡救費の不正使用問題が喧しくなつたため、これを隱蔽せんがために強行せられたユンカア一派の陰謀であるを見るのである。

『前進』紙はこの説に對して、次のやうな批評を試みてゐる。『フーゲンベルグ氏は、本にも書いてあるやうに、超資本主義者 (ein Ueber-Kapitalist) であるから、經濟相ミ農業相ミの二相ミして、二つの馬脊に乗つて、

これを制禦しやうとする。しかし人々はこれがいかに制禦せられるかを刮目して待たねばならない。何んぞなれば、東方世襲土地所有者の利益は、一にたゞ工業の犠牲によつてのみ、期待し得るからである。そして六、七百萬人の失業者を有するドイツ國民は、工業的生産及び輸出貿易を無視するわけには行くまい。』こ。米
エコノミスト誌の云ふてゐる要素も、確に今度の政變の基底に横つてゐるこを、否認し得ない。それは確に一つの要素である。しかし、『前進』紙の批評も亦正しい。故に要するにこの政變は、エコノミスト誌の云ふがごとく、決して單純なものでないのである。

＊ "Vorwarts" 8. Feb. 1933. (社會民主黨機關紙)。『レンクラフ』の首領アルツェンスレーベンの言が用ゐられてゐる。
其三、これも英國新聞紙、例へば "Daily Express" 紙などに現はれた見解であつて、前宰相シュライヘル將軍を中心とする軍閥の帝政復讐運動であるとするのである。

『デイリー・エクスプレス』紙によれば、この政變は『これまで劃策されてきたシュライヘル將軍のクーデターである。』＊としてこの見解に關聯して傳へられてゐる一つの風説がある。それは、當時ポツダム駐屯師團がベルリンに進軍する計畫があつたこと云ふことである。のみならずヒトリア内閣新軍務相プロムベルグは、就任と同時に、軍務省の軍務局長 (Chef des Ministerantes) たるブレドウ大佐 (Oberst von Bredow) を、賜暇の名目

で罷免したのは、この進軍の責任に關係してゐる、ミ云ふ風説まで立つたことである。米米
しかしこの英國評論界の報道の後段については、次の諸點に於て疑問がさしはさまれる。

(一) ポツダム師團のベルリン進軍の意味について、見解が必ずしも一致してゐなかつたこと。例へば或ものは、ヒトリアのハンブルグ戦線内閣の成立を阻止して、シュライヘル政權を維持せんミする意圖の下に行はれたのだミ云ひ、或ものはこれミ異り、むしろホーヘンツォルレン王政の復讐のためであつたミ云つてゐることである。米米米

(二) シュライヘルみづから聲明してこの風説を取消してゐることである。そして併せてかかる運動について彼みづからの見解を表明し、自分の職責上かやうなこミがあれば、斷然禁遏してゐるのが當然であること、また自分ミしては此際ハルツブルグ戦線の成立によつて、議會的基礎のある内閣の成立することを希望してゐる事及びブレドウ大佐の罷免は、内閣更迭の結果以外に理由のない事なきを明にした。米米米

(三) オーストリアの新聞『ノイエールフライエールプレッセ』紙は、二月一日の巻頭に『シュライヘルよりヒトリアへ。ハルツブルグ戦線は如何にして成立したか。』ミ云ふ見出で次のやうに述べてゐる。

『……………秘密の數々の攪亂が、かつてブリーニングを地下に葬つた。それは彼が丁度大改革を遂行しや

うさしたまきであつた。パーペンはしかし決して君側の奸臣 (Kamartilla) によつてではなく、自己の閣内の…………… (破損數字不明) ……反抗によつて倒れた。シュライヘルは本來…………… (全上) ……みづから政權を掌握するに至つたのではあつたが、また一種の奸計の犠牲になつた。恰もシュライヘル内閣の瓦解の日に、「中央黨」(Zentrum) のベルリンの機關新聞紙「ゲルマニア」(Germania) が、次のごとく書いた——「政府の倒壊は、恐らく一つの政策に關したこゝであつたと思はれる。しかしこの倒壊が、樂屋と秘密的誓約によつて試みられ、且つ企てられたとするならば、それは最早、政策は名づけがたゝ。」……………」

そして同紙は、シュライヘルが、決して軍事的支配を欲するものでなく、彼はむしろ議會と妥協して圓滿に政治を行はんとする賢明な人物であつて、「社會的將軍」(Soziale General) の名にふさはしいものであるから、大統領が若しも彼に、議會解散權を賦與してゐたとするならば、却つてヒトラーの勢力が打破されてゐたであらうと、シュライヘルと軍閥のために辯護してゐるのである。***

これによつて、私共は、英國側と獨逸側との見解が對立してゐることを知る。しかしそれによつて英國側の報道が、直ちに誤報であるとも云ひ得ないのであるが、同時に、獨逸側の主張が正しいとも云ひ得ないのである。

何ミなれば、そこには、ドイツ軍閥の勢力の勃興が、極めてデリケートな國際政治關係を含んでゐるからである。

しかし私はここに一つの事實を推測することが出来る。それは近年のドイツ中央政權が、シュライヘルを中心とする軍閥の勢力によつて陰密の間に指導されてをり、ヒンデンブルグ大統領をめぐる宮廷的陰謀政治が、ミクにシュライヘル及びその下に屬する軍閥によつて行はれてゐるミ云ふ見方を基礎つけた一つのドイツ人の著述が、少からず英米の輿論のうちに浸み込んでゐるミ云ふ事實である。それは次の書である。

Walther Schotte, Das Kabinett Papen-Scheicher-Gayl, ("Männer und Mächte") Leipzig 1932.

この書の内容については後述するけれども、昨年五月に於けるこの表題の内閣の成立の陰謀を暴露したものであつて、この著者みづから所屬する官僚の政治的結社たる『ドイツ＝ヘレンクラフ』(Deutsche Herrenklub)の指導に非ずして、それがむしろシュライヘルを中心とする軍閥的フロンドの劃策に基くものであることを論證したものである。

ドイツ軍閥の擡頭に神經を動かしたつ、ある舊聯合國が、この著書の論旨をそのまゝ肯定することは、最近一年のドイツ政局の動きに照しても、極めて容易なことであるが、米國の政治雜誌『カアレント＝ヒストリー』

(Current History)にも亦、昨年十月號に載せられた論文のうちに、この書が引用せられ、且つその論旨が肯定せられてゐたのである。***

今回の一月三十日の政變が、この論旨からいかに解釋せらるべきであるか？ シュライヘル軍閥の敗退であるのか、或はその發展なのであるか？ かやうに特にデリケートな關係にある歐洲諸國の政治的評論から、私共はこの政變の真相を簡單に理解するのことはできないであらう。結局、私共はこの政變にまで至るドイツ内政の發展過程を精密に追跡するの他に、この真相を究める手段を求めることができないのである。

* "Berliner Tageblatt," 31. Jan. 1933, S.1. (獨立、但し「民主黨」系)

** "Berliner Tageblatt," 1. Feb. 1933.

*** "Vorwaerts," 3. Feb. 1933.

**** "Vorwaerts," 1. Feb. 1933.

***** "Neue Freie Presse" (Wien) 1. Feb. 1933. (獨立、自由主義)

***** "Current History" (New York Times) の昨年十月號に掲げられた Ludwig Lore, Von Schleicher at Ger many's Helm.を稱する論文に於ては次の如く評せられてゐる。

「Dr. Walther Schotte は封建的／＼リントラン創立者の一人であつて、現内閣（ノアヘン内閣）を指導しつゝある者の一人であ

るが、彼の最近の著作「バアベンシユライヘルガイル内閣」は、如何なる範圍で此勢力(シユライヘル軍閥の勢力)が、獨逸政局を指導しつゝあるかを示してゐる。……………」
そして著者の見解を肯定してゐる。(二二頁)

三、一月三十日政變の經過

一月三十日政變の經過は、昨年十一月バアペン内閣瓦壞以後の政局の發展の聯續に外ならないものであつて、特にこれから切り離して論じ得べきものではない。私は考へるのであるが、世間にはこれを切り離して考へてゐる者も多いのであるから、説明の便宜上、ひきまつここには切り離して説明した上、倒叙的な説明の方法を以つて、過去に溯つて行くことにしやうと思ふ。

先に述べたやうに、最近のドイツ政局が、大統領ヒンデンブルグを取り巻く親近的勢力によつて指導され、その中心が議會を去つてヒンデンブルグ側近の勢力に移りつつあること云ふことは、既に昨年一ケ年間に於て、世界の評論界に於て公認せられた事實である。見てよいであらう。*

本年一月下旬シユライヘル内閣動搖の報が傳はるや、この度もドイツ内外の評論界は、同様な見解を示した。

例へば『前進』紙は『宮廷の奸臣動くー』(Kamarilla an Werke)を叫んだ。米米また『ノイエフライエープレセ』紙は、『奸計の犠牲になつた』(einer Intrige zum Opfer gefallen.)を述べてゐる。米米しかしそれがいかなる奸計であるか、また何者が所謂その奸臣であるかについては、少しも明白に述べられてゐない。それは明白に述べなるべく餘りにデリケートな内容を持つてゐたには違ひないのである。

米田上種治氏の『國家學會雜誌』本年一月號に寄せられた一九三三年度海外事情・獨逸に關する敘述のうちにも、かやうな見解を認められてゐるやうである。既述『カアレントヒストリー』誌・十月號の所論は、もつと明確にこの事實を肯定したものである。其他。

米米 “Vorwärts,” 27. Jan. 1933. この社會民主黨機關紙の絶叫は、歴史的興味からのみ眺めてはいけぬ。この黨がファッショ化防衛の最後の一线を哀れにも信じてゐた『社會的將軍』シュライヘル内閣の崩落であつたのである。この叫びは此の黨員の腸から出てきた悲哀の叫びだったのである。(同紙、一月廿八日夕刊参照)

米米米 “Neue Freie Presse,” 1. Feb. 1933.

クリスマスの休暇を終つた一九三三年のドイツの政界は、一月四日の議會の『元老會議』(Altestenrat)米を以つて開始された。昨年末シュライヘル内閣の成立と共に、共產黨以外の各政黨との妥協が成つて、議會を一月十日まで休會する案が成立してゐた。米米しかしシュライヘル内閣の對議會政策が、未だ確定を見るに至らない

ので、一月二十四日までの休會延期が、政府より議會各政黨に提案されたためである。

＊ 『アルテステンラート』はドイツ聯邦議會各政黨の院内協議會であつて、議事日程の決定を行ふ。

米米 聯邦議會の『元老會議』では十二月十九日にこの休會の最終決定を見、それまで決定しなかつたナチス黨の態度も、漸くこのまき休會賛成に決定した。また聯邦參議院の方では翌十二月二十日に同案が可決された。議會は十二月六日の總選舉の後をうけて、十二月六日に開會さるべき筈であつたのである、これが所謂『休戰法案』(Amnestiegesetz)によはれた案である。

しかるに一月六日の夕刊は、突然異常な報導を傳へてきたので、ドイツ政界は、騒然たるに至つた。その内容は前宰相バアペンミヒトラーがケルンに於て會見したと云ふ事實であつた。

一月九日夕刊の『ベルリナアターゲブラット』紙は、この兩者のケルン會見に引づくバアペンの足ざりについて、細かに報導してゐる。それによれば、この會見は、次のやうな四つの事實から成つてゐる。

(一) ケルンに於ける會見。バアペンミヒトラーとの間に、民族主義諸黨の統一戰線を作らうとする久しい問題への、或る進捗を見たこと云ふこと。

(二) その足でバアペンは、デュッセルドルフに Dr. Glasebeck なる人物を訪問したと云ふこと。この人物はカトリック教徒中の民族主義的フラクションを以つて構成されてゐる『カトリックドイッ民族黨』の西部委員會議長である。その會見の目的に就てターゲブラット紙の報ずるところによれば、このカトリック教

徒の保守的分子が、『中央黨』及び『バイエルン人民黨』なきから分離して、民族主義統一戦線に参加すべきことを彼は懲憚したものだ云ふことである。バアペン自身も、同じやうな立場にあるカトリック保守主義者であつて、昨年五月、その組閣に當り、中央黨籍から追はれた人物である。故にこのデューセルドルフ會見についての報道は、恐らく正しいであらう。

(三) その足でバアペンは更にドルトムントに二人の重工業家を訪問した。一人は Dr. Springorum であつて製鋼業聯盟 (Vereinigte Stahlwerken) の關係者であるが、バアペンは彼を同伴して更に他の一人 Vogel に見会した。フョグラアはこの聯盟の總裁 (Generaldirektor) である。このドルトムント會見の内容については、シュライヘル内閣の社會政策及び經濟政策が、社會民主黨の支持を受けるほゞ進歩的傾向を有する。こゝに對する、一般實業家の不平不満について聞くためであつた。ターゲブラット紙は記してゐる。私の判斷では、それも一つの事實であつたと思ふけれども、その外にケルンに於て成立せる民族主義統一戦線に對する諒解を求め、それに對する後援を要請し、精神的物質的の助力を乞ふためであつた。考へられる。むしろこの方が、主要な目的ではなかつたかと思ふ。それは二つの理由からである。一つはバアペンにシュライヘルとの間に對立がある。見るこゝに疑問が存する。云ふこと (次項參照)、むしろ兩者は

諒解の下に、この會見を行つたミ考へられること、及び其の後間もなく行はれたリップ市の地方選挙で、昨年十一月以來初めてナチス黨が好成績を擧げることができ、何れよりか裕かな選挙資金を得たのではないかと云ふ推測が充分立ち得ること(後述するやうにナチス黨は非常に昨秋來運動資金に行詰つてゐた)これである。なほシュライヘル内閣の政策が實業家の満足するものでなかつたこと云ふことは、軍閥そのものの立場から當然生ずる結果であつて、それについては後に述べやう。

(四) パアベンは右三つの會見を終つて、最後にシュライヘル宰相に會見してゐること云ふこと、そしてこの會見は、以上三つの會見の結果の復命に過ぎなかつたこと傳へられてゐることこれである。*

所謂ケルン會見なるものは、かやうな四つの會見を包含してゐる。そしてこの四つの會見は切り離し得ない一つの目的の下に行はれたものであること云ふことが推測に難くない。この會見問題の中心點は、當時の宰相シュライヘルがいかなる意味で、それに關聯してゐるか云ふことに存在してゐる。この點の解決如何によつて、シュライヘル内閣瓦解の意義が、全く異なる反對の内容を持つやうになるのである。

この點については、當時ドイツ新聞の見解は、事實上動搖してゐたのである。少くもそこに二つの見解が對立してゐた。

(一) 『ドイツ國民黨』(Deutsche Volkspartei)の機關紙なる『テエクリッヘ＝ルンドシャウ』紙は、そのうちでも對立的な見地を表明したものであつた。すなはちこの會見は、一方に於ける Nazis — Stahlhelm — Hugenberg — Papnの結合が、これに對立する Schleicher — Strasser (Gregor)の結合的勢力の對立的意義を示すものだした。***

(二) 『ベルリナー＝ターゲブラット』紙は、かやうに對立的には見なかつた。その述ぶるところによれば、ケルン會見はむしろシュライヘル支持の下に行はれたものである。ただしかしの民族主義諸黨の統一戦線の成立の結果、シュライヘル内閣は隱退するに至るであらう。そしてダレゴル＝シュトラアセルが、次で成立すべきヒトラア・バアペン内閣に對して、必ずしも反對せざるべきことは、ヒトラア黨の機關紙たる『フォルキッセ＝ベオバハテル』(Völkische Beobachter)の傳ふるところによつて知られる、云ふのである。***

以上の二つの見解の何れが正しいか云ふ判斷について、今一つの資料を提示する必要がある。それは一月九日シュライヘルミバアペンが聯名の聲明書を發表して、兩人の對立云ふことは、事實無根の虚報に過ぎないことを述べてゐるところである。***

附けることができないことを知るのである。私はむしろこの兩人の聲明をそのままに信用し、且つ上述のターゲブラット紙の立場の方をより正肯を得たものこそ考へものであるが、何故にさう考へるか、また何故に『テエクリヒールンドシャウ』が、かやうに對立の尖鋭化を傳へたかについては、昨秋の政局過程をも説明した上でないし、充分に明にすることができないのである。故に後の説明に譲る。

ここにはただケルン會見を、事實の上から述べて置くに止める。

* "Berliner Tageblatt," 6. Abend—9. Abend, Jan. 1933.

* * "Berliner Tageblatt," 8. Jan. 1933.

後述するやう十二月に Gregor Strasser 一派は Hitler を分裂し、シュライヘンに接近しつゝあつた。その意義は後に述べよう。

【ドイツ國民黨】は、もつとレーゼマンの率ゐるた政黨で、目下 Dr. Eduard Dingeldey を總裁としてある著名の政治家の集團であるが、特に石炭、鐵礦、製鋼業の如き重工業の利益を代表する政黨であり、政綱は民族主義的自由主義であること云つてよい。即ち自由民主主義よりは保守的であり、保守的民族主義よりは進歩的である。ドイツ政界の立場から云へば、フーゲンマンの【ドイツ民族主義國民黨】(Deutschnationale Volkspartei) の左に傾き、【中央黨】や【經濟黨】(Wirtschaftspartei) や【舊民主黨】(Deutsche Demokratische Partei) なども現【國家黨】(Staatspartei) なども右に傾く。自由なる君

主義は、その希望するところである。かやうな此黨の立場から、おのづから右の對立的見解が生れてくることは、或る意味に於て理解されないわけではない。或る意味とは如何？ 重工業家のシュライヘルに對する立場と民族主義諸黨に關係するその立場とが、互に矛盾してをって、ヒトラーも完全には一致し難い。シュライヘル及ヒトラーにはファツシヨの危険性があり、保守的的民族主義には農業重要視の傾向が強いからである。

しかし此の新聞が對立觀を強調したと云ふこの裏には、兩者の完全なる合體を希望し、その上にまたがつて自らこれを制御したいと云ふ意思を示してゐることも解せられるであらう。

かやうな意味で、この種の對立觀は、事實の報道としては、餘り價值を持つてゐないのではないかと思はれる。

*** “Berliner Tageblatt,” 6. Abend, Jan. 1933.

*** “Berliner Tageblatt,” 9 Jan. 1933.

このケルン會見の報道の直後、ここにまた特に注意すべき報道が新聞紙上を賑はした。それは二日に亘つてターゲブラット紙の第一面を占領したセンセーショナルな次の二つの記事である。

(一) 一月十一日の同紙劈頭の見出しは『ヒトラーの方向轉換—』(Hitlers Schwenkung)であつた。

(二) 翌十二日の同紙劈頭の見出しは『ナチスの資金缺乏—』(Geldnöte der NSDAP.)であつた。*

何故にヒトラーの誹謗に關したこの二つの記事が、今更こゝあたらしく書きいだされたか云ふ點に、問題の核

心がひそんでゐる。

ケルン會見の結果、民族主義統一戦線が成立したとしても、それはすでに一月六日乃至九日の新聞紙上に於て、殆んど論じつくされてゐたを見てよい。それにも係らず何故に、一月九日のケルン會見の報道から二日經た一月十一日とその翌日とに、今更こんな記事を、かくセンセーショナルな形式で、載せねばならなかつたか。それにナチス運動資金の缺乏云ふことは、昨年中に於ける二回宛の大統領選挙及び聯邦議會の總選挙、更に四月のプロシア議會の選挙から十二月のアルスドルフの選挙に至るまでの度重なる地方選挙に於ける闘争から見ても、決して今更こゝあたらしい問題ではなかつたのであるが、しかもすでにこの一ケ年を通じて、特に昨年五月バペン||シュライヘル内閣成立以後に於けるナチス黨の苦戦的狀態から見ても明かなことであり、事實上すでに昨年秋十一月六日の總選挙及び同月十三日のリューベック外六市、十二月四日テューリンゲン地方の選挙に於けるナチス黨の得票の減退及び十二月十八日に行はれたアルスドルフ (Alsdorf) 地方議會の選挙に於けるナチスの著しい敗北なきを通じて認められてゐた。***

しかるに何故、今更ナチス黨費の缺乏が、取あげられねばならなかつたか？ それは、それより三日の後に迫つてゐるリップペ||デトモルド地方議會の選挙、並に一月二十日まで休會せられてゐる聯邦議會が、開會されるこ

きに來る解散の脅威を、ヒトラーが如何にして打開せんとしてゐるか云ふ點に、問題が關聯してゐるからである。

當時解散を恐れてゐなかつたものは、唯、共產黨があつたのみであつて、他のいかなる政黨も解散を欲してゐなかつたことは明である。そのためにシュライヘル内閣成立後、議會は休會して、解散以外の何らかの打開策を求めやうとした。

就中、ナチス黨は、昨秋のバアペン後繼内閣問題で、大統領から組閣の相談をうけながら、遂にそれに失敗した云ふことが、直接の原因となつて、ヒトラーに對する不信任の問題が黨内に生じ、副總理格のグレゴル・シュトラアセルが脱退し、フェーダアがヒトラーの經濟政策に反對して脱落し、フリック博士も亦反對の意思を表明したが、慰撫されて留黨した云ふ分裂の驗ぎを経験した後、未だいくばくもない時であつた。もよより十一月六日の敗北は、この紛争の主要原因の一つであるが、十一月十三日、十二月四日及び同月十八日の選挙に於ける著しいナチスの敗北は、明にこの紛争の結果を示すものでもあつた。

かやうな黨内外の情勢が、ヒトラーをして方向轉換を餘儀なくせしめ、且つ方向轉換することによつて、或る方面からの黨費の支給を受け得る望みがあつた云ふことは、何人にも容易に推測され得られるところであら

ら。

* "Berliner Tageblatt," 11. u. 12. Jan. 1932.

米米 (一) 昨年十一月六日の總選挙の結果は左の如し。左派は七月の選挙の結果と比較すると、("Berliner Tageblatt," 7. Abend, Nov. 1932.)

Nationalsozialisten	11 712 983	(13 745 780)	195	(230)
Sozialdemokraten	7 233 534	(7 959 712)	121	(133)
Kommunisten	5 972 702	(5 282 626)	100	(89)
Zentrum	4 228 364	(4 583 336)	69	(75)
Deutschnationale	2 951 839	(2 186 051)	51	(37)
Bayr. Volkspartei	1 080 124	(1 192 684)	19	(22)
Deutsch. Volkspartei	659 931	(436 014)	11	(7)
Staatspartei	326 805	(371 799)	2	(4)
Christlichsoziale	402 803	(364 542)	5	(3)
Wirtschaftspartei	110 830	(146 875)	2	(2)
Landvolk	164 848	(90 554)	—	(—)

Sonstige Parteien 559 955

Insgesamt 35 402 386 (37 163 084) 582 (608)

(二) 昨年十一月十三日リヒター・ツック・ラインチヒ・マレスラン・ヴァニツツ・ツッキカウ・ブラウエン・シュツェン(ン)の分統計を缺ぐ)なるに市會の選挙が行はれた。その結果は次の通りである。(去る十一月六日の結果との比較である。)

(Vorwaerts, 14. Abend, Nov. 1932.)

	(Nazis)	(SPD)	(KPD)	(Zentrum)
Luebeck	23 687 (31 613)	30 317 (32 036)	9 940 (9 804)	765 (964)
Dresden	104 107 (134 333)	103 883 (123 135)	59 780 (64 515)	6 643 (7231)
Leipzig	101 090 (128 558)	132 871 (153 698)	96 275 (100 202)	=====
Zwickau	14 283 (204 56)	10 738 (12 765)	7 567 (8 222)	=====
Chemnitz	69 538 (79 766)	56 630 (59 227)	47 574 (47 685)	=====

全体的に前の選挙よりも投票總數が減退してゐるから、簡單に比較されないけれども、全体的に退顯的な傾向が窺はれる。

(三) 十二月四日テネーリッゲン地方町村議會の選挙に於けるナチスの得票は、次のやうに、著しい減退を示してゐる。(“Berliner Tageblatt”, 5. Abend, Dez. 1932. S.1. “Zerstörer Nimbus.”)

(Stadt)	(31. Juli)	(6. November)	(4. Dezember)
Weimar	12 642	11 003	7 122

ドトラナ内閣成立の真相 (第三卷第二號)

(一五)

二五

Gera	20 191	16 577	13 809
Jena	10 909	8 420	6 459
Gotha	12 172	10 046	7 565
Eisenach	9 962	8 002	5 980
Apolda	7 970	6 389	4 430
(Landkreis)	(31. Juli)	(6. November)	(4. Dezember)
Weimar	28 072	20 570	15 778
Meiningen	25 046	22 180	16 193
Hindburghausen	19 454	16 616	12 839
Schleiz	15 805	12 835	8 941
Greis	16 350	14 322	10 997
Gera	23 685	17 735	12 769
Saalfeld	13 427	14 739	10 645
Rudolstadt	16 746	11 381	8 102
Arnstadt	23 919	18 821	15 693

Sonderhausen 19 920 16 313 11 352

次に、この選挙の成績に於ける各政黨との比較に於て如何なるものであるか。(全下紙・最終頁の報道記事)

	(Weimar)	(Jena) ■	(Eisenach)	(Gera)
N.S.D.A.P.	7 122(11003)	6 459(8420)	6 002(8002)	13 804(16577)
S.P.D.	3 347(5491)	7 480(9615)	3 759(5444)	17 142(18654)
K.P.D.	2 704(3914)	6 369(7442)	5 745(6397)	6 464(8805)
D.N.V.P.	2 272(3768)	1 893(3635)	2083(3415)	—
Zentrum	619(636)	—	461(493)	—
Staatspartei	—	2 839(2005)	665(405)	—
u.a.	—	—	—	—

(ナチスの得票については、前掲の表の数字を少しく異なるものがあるが、これは何れが正しいか未だ不明である。)

(四) 昨年十二月二十日朝刊に發表せられたアムストルムの選挙の結果は左の如し。(十一月六日の比較である) (“Berliner Tageblatt,” 20. Morgen, Dez. 1932)

Nationalsozialisten	496 (914)	1
Sozialdemokraten	825 (1 146)	3
Kommunisten	2 512 (3 318)	10

Zentrum	1 825 (2 637)	7
Bürgerliche Parteien	987	— 3
Sonstige Parteien	419	—

ナチス得票の減退は、この比較に於て、四五・二%であるが、投票總數が二三%の減退を示してゐることを考慮に入れても、なほ約三分二以上の減退を示してゐる。黨内分裂の影響が益々著しく認められるわけである。後の數字は當選者である。

しかしヒトリアの轉向はいかなる方向への轉向でなくてはならないか？ 云ふまでもなくバアペン・フーゲンベルグミのハルツブルグ戦線へ向つての轉向であることは想像に難くない。しかしこの方向轉換が何故に、かやうな重要な意味を持つか云ふに、それは僅か一ヶ月以前の昨年十一月バアペン敗退後の政局に於て、政府側から約半ヶ月に亘つて試みられた努力であつたにも係らず、遂に不成功に終つた方向轉換だからである。

しからば一ヶ月以前に不成功に終つた事柄が、今度は何故にかくも急激に成功を見るに至つたか？ この間の事情は、この期間に於けるドイツ政局の推移を通じて説明されねばならないからその説明は後に譲るゝして、ここにただ私は、このハルツブルグ統一戦線の報が傳へられてから以後、すなはち一月十五日に行はれたリップペルトモルドに於ける地方議會選舉の結果が、上述せる昨年末の諸選舉の結果と比較して、著しい對照を示してゐる。

るこゝを注意したい。即ち左の如し。

一九三二年十一月六日聯邦議會の選舉に於けるナチスのリップペに於ける得票 ……三三、〇三八

一九三三年一月十五日リップペ地方議會の選舉の得票 ……三八、八四四

一九三二年七月三十一日聯邦議會の選舉に於けるナチスのリップペに於ける得票 ……四二、二八〇

すなはちリップペの選舉は、去る七月の選舉に於ける得票數を恢復するまでには至らなかつたが、同年十一月の選舉に比すれば少しく好成績であつた。これを當選せる議員數の上から見ても、一九二九年一月六日に選出された舊議會に於て、僅に一名を有してゐたのに反し、今回は一躍して九名の議員を獲得し、これまで第一黨たりし社會民主黨を壓して、リップペ地方議會の最大政黨となつたのである。故にその示威的意義は大きかつた。*

* リッペ―デトモルドの地方議會の選舉の結果は次の如し。最初の表は各黨の議員數を示し、後の表は、三つの政黨の得票の變動を示すものである。

Nationalsozialisten	9	(1)
Sozialdemokraten	7	(9)
Kommunisten	2	(1)
Deutschnationale	1	(3)

Deutsche Volkspartei	1	(3)		
Staatspartei	0	(1)		
Lippische Landvolk	0	(1)		
Evangelische Volksdienst	1	(0)		
Katholische Volksvertretung	0	(0)		

(Wahlen)	(NSDAP)	(SPD)	(KPD)	(有効投票總數)
15. Jan. 1933	38 844	29 735	11 026	98 449
6. Nov. 1932	33 038	25 782	14 601	95 098
31. Juli. 1932	42 280	30 399	10 017	102 814
14. Sept. 1930	20 430	30 149	5 861	91 544
6. Jan. 1929	2 708	31 540	4 987	80 905

(“Berliner Tageblatt”, 16. Abend, Jan. 1933)

かやうな、一時衰へつつあつたナチスの勢力の復興の原動力が、何處に潜んでゐるか？ 右の復興は單に偶然であつたか？ 歴史の研究者の前には、常に偶然はあり得ないのである。ここに於て私共はこの選挙の数日前に、ターゲブラット紙が叫んだナチスの資金缺乏ミヒトラアの方向轉換に關する記事を思ひ起すのであつて、

そこに何らかの諷刺が含まれてゐなかつたかを思ふのである。私共が、この問題に結びつけて、ナチス復興の原動力を説明したい衝動に驅られるこゝは、最も自然ではあるまいか。然らばその物質的原動力は何處から貢がれたか？

そしてそこから、更にドルトムンドに於ける、バアペンミ重工業家ミの會見にまで、因果關係を求めて行くこゝは、果して不自然なこゝであらうか？

リップ選挙前、今一つの事件が起つた。それは別に珍らしい事件でもなかつたが、『東方匡救問題』の再燃であつた。

一月十二日“Reichslandbund”（全國農業聯盟）の主腦者がシュライヘル宰相を訪問して、東方匡救の實狀を述べて、諒解を求め、同時に一般に向つて聲明書を發表したのである。翌十三日には聯邦議會の豫算委員會は、次の三方針に基いて、東方匡救政策の實狀に對する調査委員會を任命し、その調査を決議した。すなはち（一）東方諸州の土地債務の救済は如何なる實績を有するや、（二）東方匡救案による大地主の所得ミ中小農の所得ミは、いかなる比較になつてゐるや、（三）一九三二年中に植民の實施せられたる地域の廣さ如何、そして一九三

三年度に於ける豫想如何、ミ云つたやうな諸點を中心ミする調査である。

それと同時に、十三日の朝刊紙には早くも“Reichsverband der deutschen Industrie”(全國ドイツ工業聯盟)の、全國農業聯盟の聲明書に對する反對聲明が發せられ、議會の豫算委員會に於ては、東方匡救費疑獄問題さへ暴露せられるに至つた。*

この東方匡救費問題をひつさげて、政府糾斷の先鋒に立つたものが、中央黨ミ社會民主黨ミ共產黨ミであつて、その餘先に立たされて防衛せざるを得なかつたものが、バアペン及びこれを支持してゐるフーゲンベルグの『ドイツ民族黨』ミであつた。ナチス黨も亦この攻撃の矢面に立つたもの、一つであつたが、それはこの東方匡救費によつて一向失業救済は行はれず、ただ金融資本家に對して莫大な負債を負ふ封建的大地主が救済せられるのみでなく、更にこの匡救費が右翼民族主義諸黨の政黨費に流用せられ、ヒトラーも亦そのおこぼれを頂戴したミ云ふにあつた。*米*

この問題は政局にいかなる影響を齎したかミ云ふに、シュライヘル内閣にミつては、極めて不利な狀勢を生み出したのである。何故かと云ふに、先に述べたやうに、社會民主黨の支持をうけるやうなシュライヘル内閣の社會政策及び經濟政策に對しては、初めからすでに重工業家が反對しつゝあつた。しかるに今また東方匡救費問題

が暴露せらるるに至り、これをもみ消さんとする封建的大地主層の政治的策動が起つたからである。すなはち彼らはその真相の暴露を隠蔽するために、さうしても彼れらみづから政權を確立せねばならぬ必要に迫らるるに至つた。***

これまでハルツブルグ戦線の再興に對しては、單にヒトリアが動かかなかつただけではない、フーゲンベルグ・ゼルデの側も動かうしなかつた。しかるにヒトリアの窮乏は彼に方向轉換を迫つた。しかるにフーゲンベルグ側の保守的民族主義者が、今更その統一戦線の再興を必要とし、むしろその側からケルン會見その他の策動の起されたのは何故であつた？ その理由はこの東方匡救疑獄事件で説明され得るであらう。

これがまたフーゲンベルグ・バアペンらの背後に糸を引く『ドイツ＝ヘレントラプ』(Deutsche Herrenklub)と稱する官僚的勢力の策動ともなつた主要原因でもあらう。

* "Berliner Tageblatt," 13. Morgen und Abend, Jan. 1933.

** "Berliner Tageblatt," 21. 24. 25. 26. u. a. Jan. 1933.

*** "Berliner Tageblatt," 28. Jan. 1933.

右に引用されてゐる "Deutsche" (カトリック勞働組合の機關紙)の見解によれば、シュライヘル内閣打倒の主因が、シュライヘルの東方匡救費疑獄暴露に反抗して、この問題を圓滑に解決せんとする点にあつたとしてゐる。

これらの動きが事實上、一月中旬のドイツ政局の上にごう云ふ風に現はれてゐるか？

(一) 一月十四日の『ターゲブラット』紙夕刊は、前日シュライヘルミフーゲンベルグミの會見を傳へ、内閣の改造を條件として、協力すべきことを相談したことを記してゐるが、同時に議會の解散についても相談したことを云ふことである。その際内閣改造に關聯して話題となつたものは、フーゲンベルグの外に中央黨の Stegwald の入閣、グレゴル・シユトラアセルの副宰相兼プロシア執監就任であつたことを傳へてゐる。*

しかしこの試圖は『キリスト教労働組合』の方面から傳へられてゐるやうに、到底不可能なことであることを云ふことである。*米

米 故にこの報道には疑問が多いと思ふ。何んとなれば中央黨やフーゲンベルグやグレゴル・シユトラアセルなどを誘ふて、ヒトラーに對立する戦線を敷くと云ふことは、當時屢々傳へられたところではあつたが、若しシュライヘルミがそれを試みたことすれば、或りに不明に過ぐることを考へられるからである。その不能なることは、上に述べたやうに、當時の情勢から充分に推知し得るところであり、同時にバアベン・ヒトラーのケルン會見と矛盾するところがあるからである。

(二) 一月十六日に至つて、シュライヘルは公然、議會諸政黨との折衝を始めてゐる。その動機は、云ふまでもなく二十四日まで再三引延ばされてきた議會の開會までに、内閣の議會的基礎を確立する必要がある、然

らざれば、更に休會期を延ばす必要が差迫つてゐたからである。そしてシュライヘルとしては、妥協が解散か、その一を選ぶの外に方法を持たなかつたのであつて、一面には解散を以つて脅かしつつ、他方に妥協連動を進めてゐたのである。***

(三) 東方匡救費疑獄問題が燃焼的になつてきてから、ナチスのミュンヘン機關紙『フォルキッセルペオバハテル』は、シュライヘル内閣の農業政策攻撃の意味でこれを利用しやうとし、十五日のリップペ戦勝以後、益々シュライヘル内閣攻撃の鋒を鋭くしつゝあつたが、しかるに不思議にもそれと同時に、他方またシュライヘルとヒトラアミの結合運動についての報導が現はれてきた。

其一はバアベンがフーゲンベルグを同伴してケルンにヒトラアを尋ね、シュライヘルミの提携について話したこゝ、そして政府方面でもその可能性を信じてゐると云ふ報道である。

其二はナチスの關係者であり、且つ『ドイツヘルンクラブ』の首領であり、同時に世上では政治的策動家として知られてゐるフォン・アルヴェンスレーベン (v. Alvensleben) が、直接シュライヘルを訪問して、ヒトラアが妥協するならば、シュライヘルは、彼を迎へる意思を有するや否やを確めたと云ふ報道である。しかしこの質問に對するシュライヘルの答は、否定であつたから、この計畫が失敗に終つたこと云ふのであ

る。***

この二つの報道は共に十九日のターゲブラット紙朝刊に現はれてゐる。ここに於て、シュライヘルに對するヒトラーミフゲンベルグ・バアペン及びヘレンクラブの勢力が、對立的であること云ふ見解が有力になるのである。なほこの説をより有力ならしむる事實として、度々シュライヘルミヒトラアミの直接會見説が傳へられたにも係らず、遂にその實現を見るに至らず、一月十七日には、却つてヒトラーがミュンヘンからベルリンへの途上、ワイマールに於て、グレゴル・シュトラアセルミ會見し、シュライヘルの議會解散に備へるための共同戦線について協議したことを傳へられたことである。***

しかし他面ナチスが、新しい選舉に對する脅威を感じ、従つてまた、シュライヘル内閣不信任案の提出には、反對であつたことも事實である。***

これによつて見るに、一面に、シュライヘル軍閥をハルツブルグ戦線に包擁せんとする努力が、官僚或は軍閥の、何れかのイニシアチーブの下に行はれた。しかしこの企圖は結局、未だ完全な成功を見るに至らなかつたこと云ふことが事實である。

しかしながらそれと同時にシュライヘル自身は、いかなる意圖で動いてゐたか？、ここに問題の重心が存して

る。

上述するごとく、ハルツブルグ戦線に對するシュライヘル的態度は、對立的であると同時に、また密接なる關係をも有してゐた。彼が傳へられるやうに、ハルツブルグ戦線に矛盾するところの勢力の結成について考へてゐたミすれば、それは當時の情勢に對して餘りに不明であるミ云ひ得るミ同時に、事實上矛盾したミである。シュトラアセルを誘ひ、シュテীগワルドを引込んで、フーゲンベルグと共に、ヒトラアへの對抗的勢力を作りあげやうミ云ふミは、此の際、殆んき望みなきミが明瞭であつた。ここに於てかやうな風説が、何を意味してゐたかミ云ふミになる。故に結局、シュライヘルの意圖は、これまでのミ議會的基礎のない、解散ミ選舉の反覆によつてのみ、その日を過ぎてきた、薄弱なる『大統領内閣』(Präsidentkabinet)に代るに、もつミ有力な統一的地盤を有する政權を確立しやうミ云ふミにあつたミ見てよいのである。

しかしシュライヘルにしては、政黨内閣の意味で、それを欲してゐたのではない。彼の意圖はやはり『大統領内閣』であつた。然もそれが議會諸政黨の支持を受けるミであつた。すなはち一黨主義の内閣、又は政黨的協調内閣でなくして、數政黨を地盤とし議會の過半數を制する超然内閣である。

かやうな方針を以つてシュライヘルの食指が動いてゐたミ云ふミは、以上の事實だけでは論證されないの

あるが、これを昨秋來の過程に徴し、又それを後述するところの事實に徴して、云はれ得るのである。

果して然らば、ナチス一派のシュライヘルに對する反抗的態度は何を意味するか云ふに、彼らの本來の理論たるナチス一黨主義獨裁政權の確立へのシュライヘルの妨碍に對する反抗であり、また同時に彼らを自己の政權の地盤のうちに包擁して、その上に指導權を掌握しやうとする、シュライヘルの策謀に對する反動であるを以てよい。(そしてそれは當時の情勢の下では、またヘレンクラブ系の政治的意圖にも一致してゐたであらう。)換言すれば、ヒンデンブルグミハルツブルグ戦線との結合の上に、民族主義獨裁政權を確立し、その上に自己の軍閥的勢力の指導を行はうと云ふことであつたを考へられやう。*****

* "Berliner Tageblatt," 14. Abend, Jan. 1933.

** "Deutsche" 紙に現はれし各記事のうち "Berliner Tageblatt," 17. Abend, Jan. 1933 に於て引用されてゐる。すなはち中央黨は絶對反對である。

*** "Berliner Tageblatt," 16. Abend, Jan. 1933.

**** "Berliner Tageblatt," 19. Morgen, Jan. 1933.

***** "Berliner Tageblatt," 17. Jan. 1933

***** "Berliner Tageblatt," 19. Abend, Jan. 1933.

***** Vgl. "Zwischen Schleicher und Hitler." (B. Tageblatt, 19. Abend, Januar 1933, S. 1.)

しかし乍らこのシュライヘル及びヘレンクラブの策謀は、或程度まで成功したのである。

議會の『元老會議』は、二十四日までの休會を、暫定的に三十一日まで、三度延期することを決議し、なほ二十七日に今一度集會して、更に開會期を審議確定すべきことを議決した(一月二十日)。すなはちシュライヘル政權の壽命が再び約十日間延長された。しかしこの延期は、後繼内閣の準備のために外ならなかつた。

一月二十三日に至つて、愈々シュライヘルの最後の努力が初められた。

彼は、この日大統領に會見して後繼内閣の計畫を初めた。一月二十六日の夕刊新聞は、すでにシュライヘルの辭退ミバアベン新内閣の出現を傳へ、更に翌二十七日の民主的諸新聞は、ヒンデンブルグ大統領の息子オスカア || ヒンデンブルグ (Oskar Hindenburg) をして、ハルツブルグ戦線が、シュライヘル内閣の辭退を大統領に、勸說せしめつつありと傳へた。*

* オスカアは大統領の元帥たる地位に從屬する侍從武官の職にあるものであつて、自ら政治に干與し得る權限を有するものではないが、彼の特別の一身上の地位を利用して、すでに昨夏ブリューニング内閣瓦壞の時にも、策動の手に用ゐられたと傳へられて

Reo (B. Tageblatt, 27. Jan. 1933.)

そして同日、議會の『元老會議』は二十日の決定に基きて集會し、愈々三十一日を以つて議會を開會すべきこと、開會と同時に内閣不信任決議案を提出すべきことを決議した。

この報に基いて、シュライヘルは、大統領に議會解散權を要求したが、大統領はこれを拒否した。傳へられ、同時にシュライヘルは辭表をこりまこめてこれを大統領に提出し、ついでバアペンが大統領に招かれ、組閣について相談をうけたと云ふ報導が傳へられた(一月二十八日)。

『前進』紙の二十八日の夕刊は、これを次の如く評した。

『シュライヘルの倒壊は、秩序第一主義に對する危機の警報である。このこみは恐らく目下の唯一の立憲的な方法と考へられるこころの超然的官僚内閣の可能性の消失を示すものである。……』

かくて三十日の夕刊には、突如としてヒトリア内閣の成立が報道され、翌日開かるべき議會は、社會民主黨及び共產黨の反對にも係らず、大統領によつて、暫く開會を保留されるこみになつた。

新内閣には、云ふまでもなく、フーゲンベルグ・バアペンのドイツ民族黨とナチスミの二勢力が組合されてゐる。中央黨は組閣については何らの交渉をもうけなかつた。組閣後に於ては、中央黨はヒトリアからの妥協的休

戰の勧誘をうけたにもかかはらず、反抗の態度を明にしたために、新内閣は多數の基礎を得ることができないため、遂に議會は解散されることに決定した（二月一日の閣議）。

もごより新内閣にはフォン・ゼルデ (Seide) が加はつてゐる。『シュタールヘルム』團の首領であるが、この團體はすでに早くより、ハルツブルグ戦線に加盟してをり、一月十九日の新聞には、バアベンがこの團體のために、祝詞演説を行つてゐる。こゝさへ傳へられた。*

* "Berliner Tageblatt," 19. Abend, Jan. 1933

新内閣に於ては、シュライヘルの勢力は、すべて排除された。例へば先に述べた軍務局長の賜暇、シュライヘルの親近者として知られてゐる新聞検閲局長 Major Marks 及び労働省次官 Griser の辭職強要の如きである。故にこれを外形上から觀察するに、新内閣の成立は明に、シュライヘルの敗北のやうにも見える。しかし前にも述べたやうに、私はそれを半成功であるを評するのである。それはシュライヘルの意圖の半が成就したと目すべき理由があるからである。何故であるか？

カトリック労働組合の機關紙も亦、次のやうに評してゐる。

『樂屋裏の争は——暫定的には——ハルツブルグ一派の勝利を以て終つた。……しかしそれは一兩名の大農

家、フーゲンベルグ・パテン及びシャハトの勝利に過ぎないのであつて、ヒトラーはこのうちに含まれてをらず、彼はただ彼らの援護隊として利用されたに過ぎない。………』*

これは最もよく事實の真相を、また最も簡単に説明してゐると云へる。ミくに『暫定的には、ハルツブルグ一派の勝利である』ミ註を附してゐる。

シュライヘルの意圖のうちで、議會的基礎を有する超然内閣を作ると云ふ點は、ここに一ミまづ成就したのである。しかもそれはナチスの一黨獨裁制をも抑制することができた。故にヒトラーの側から見ても新内閣の成立は、決して不成功ミは云へないのである。ここにバアペン・フーゲンベルグ・ヒンデンブルグの努力があつたミ共に、またシュライヘルの努力が、功を奏してゐるこミが認められる。

更にヒトラー政權の出現が、かやうに必ずしもシュライヘルの敗北を意味するものでないミ云ふこミについて、ここに示し得る二つの資料がある。その一は、シュライヘルみづからの提言であり、他の一つは、ヒトラー内閣の構成についてである。

(一) 一月二十八日大統領に招かれ、後繼内閣の組織について聞かれたミきに、シュライヘルがこれに答へた意見の内容であるが、それは次の三案であつたミ傳へられてゐる。

(イ) 議會主義によつて多數黨内閣を作るにすが、ヒトラーの下に於けるの外、可能性のあるものはない。

(ロ) 少數黨内閣を作るにすれば、民族主義諸政黨の鞏固なる結合を必要とする。しかもこの場合にもヒトラーを首班にするに過ぎ、最有効な方法であらう。

(ハ) 何らの政黨的基礎をも有せざる純粹の大統領内閣を作るにすれば、國家權力を支持するために、特別非常の執行權力をこれに賦與する必要がある。然しこの種の内閣に雖も、事實上何れかの政黨に結ばねば事實上存立し得るものではない。

右三案のうち、事實上、その第二案が實現せられたのである。果して然らば、ヒトラーを大統領に推薦したものは、シュライヘルであつたに云ふことになる。それでもなほシュライヘルは、ヒトラーに敗れたに云ふことになるのであるか？ 彼はむしろハルツブルグ戦線にヒトラーを引込むことに成功し、第一案による、最も危険性の多い、ナチス政權の出現を阻止し得たものであつたに見られるのである。ここからおのづから、シュライヘルに對するヒトラーの反抗が生れる。それはヒトラーの敗北に外ならなかつたからである。

(二) ヒトラー新内閣は、次の諸勢力の集合である。

(イ) Hitler (Reichskanzler), Frick (Reichsinnenminister), Göring (Reichsminister ohne Geschäftsbereich und Reichskommissar für den Luftverkehr, gleichzeitig mit der Wahrnehmung der Geschäfte des preussischen Innenministers) のトリオによつて代表されるナチスの大衆的勢力。

(ロ) Geheimrat Hugenberg (Reichswirtschaftsminister und Reichsminister für Ernährung und Landwirtschaft), Franz Seldte (Reichsarbeitsminister) に於ける “Deutschnationale” 及び “Stahlhelm” の保守的民族主義 (帝政復讐運動) の勢力。

(ク) Papen (Stellvertreter des Reichskanzlers, und zugleich Reichskommissar für das Land Preussen), Freiherr von Neurath (Reichsaussenminister), Graf Schwerin von Krosigk (Reichsfinanzminister), Freiherr von Eltz-Rüdenach (Reichspostminister und Reichsverkehrsminister) に於ける官僚的勢力。

(ニ) Generalleutnant Freiherr von Blomberg (Reichswehrminister) に於ける軍閥的勢力。

これによつて見るに、新内閣に於けるナチスの勢力は、内務行政に限定されてをり、單に國內の警察的勢力のみを掌握せしめ、これによつて、ナチスをして左翼彈壓を行はしめやうとする内閣計劃者の意圖が窺はれ

る。故にナチスは決してよい役割を持つてはゐない。そして第二のハルツブルグ戦線の他の勢力は、社會政策と經濟政策を指導する地位を與へられ、農業及び失業問題を、大地主の利益に於て解決し、一面に於てはナチスの、他面に於ては金融資本家の支配から、これを救はうとする意圖が窺はれる。そしてこの勢力を中心として、帝政復興運動の發展が豫想されるけれども、しかし彼らは經濟・社會政策の指導權を有するのみで新内閣の指導權を持つてはゐない。

新内閣の主勢力は、閣員の數に於てすぐれてゐるところの第三の官僚的勢力の上に置かれてゐる。これは皆前シュライヘル内閣員の留任せるものであつて、ヒンデンブルグ及びシュライヘルの信任者である。そして軍務相プロムベルグは、ナチスの同情者だゞ傳へられてゐるが、それは彼が軍閥たるこゝに矛盾するものではない。

かやうにして右のうち第三部類に主勢力を置いてゐる新内閣が、何人の支配下に立つてゐるかは、想像に難くないのである。そこには依然として、ヒンデンブルグ・ヘレンクラブ・シュライヘルの勢力が確立してゐる。しかもハルツブルグ戦線を捕虜にした點に於て、この勢力に初めて大衆的基礎が確立した。*米

* 'Berliner Tageblatt', 28. Abend, Jan. 1933; 'Vorwärts', 28. Abend, Jan. 1933. かやうに各新聞の報道は内容に於て

一致してゐる。このことはこのシュライヘルの申立の内容が、事實であつた云ふことを信ぜしめるのである。

米米 “Vorwärts,” 30. Abend, Jan. 1933; “Berliner Tageblatt,” 30. Abend, Jan. 1933; „Manchester Guardian Weekly,” Feb. 3. 1933, P. 84.

ガーヂアン紙は、プロムベルグの軍務相を評して「国防と國軍とがプロムベルグ將軍と云ふ臆、驕、たる人物に委託された」と云つてゐる。(全上、八二頁)

かやうな意味に於いて、日本の新聞に當時現はれたベルリン電報の意義がまた理解される。すなはちそれは、餘りに簡單で要領を得なかつたものであつたが、――

(一) 一月二十六日のベルリン電報は、ヒトラーが宰相たる要求を拋棄したため、ナチス黨内に大衝動を非難が起つたことを傳へ、シュライヘル内閣を倒して、新しい大統領内閣を作らんとする運動が繼續されてゐるが、新内閣にはヒトラーは必ずしも宰相たる地位を要求してゐない云ふにあつた。米

(二) 同月二十八日のベルリン電報は、シュライヘル内閣が、議會突破の確信なく遂に辭表を提出せるが、後繼内閣についてバアベンが大統領に招かれたことを傳へ、何らヒトラーについては記してゐなかつた。米米

(四) しかるに、同月三十日のベルリン電報に至つて、突如として、ヒトラーの宰相就任が報道されるに至つた。米米米

報道が餘りに簡單であつたけれども、ヒトラーの苦戦ミ、ヒトラー内閣成立の裏面の複雑な動きミを最も簡單に窺はしめる。

なほ私はここに『ヘレンクラブの動き』について餘りに詳しく述べなかつた。それについては最後に明に述べたいからである。

米 一月二十八日、東京朝日、朝刊第二面。

米米 一月二十九日、全上、朝刊第二面。

米米米 一月三十一日、全上、朝刊第二面。

四、十二月四日シュライヘル内閣成立の事情

シュライヘルは、人の知るごまぐ、昨年五月のバアペン内閣の成立に當り、參謀本部から軍務省に進出した。

彼は一九一八年の政治革命の後をうけて、政治から獨立せるドイツ國軍を創設した功勞者である。ドイツ國軍の全勢力が彼の下に立つてゐる。その彼が、今政治に乗り出してきた。のみならず昨秋バアペン内閣崩壊の後をうけて、ドイツの全政治を指導すべき宰相の地位に乗り出してきた。世人がこれを見て、軍閥政權の成立ミ考へた

こゝは自然である。また事實上それに違ひなかつたのである。しかしシュライヘルは、かやうな形式でかくも急激に、政治の表面に一身を曝すこゝを望んだかきうか、甚だ疑問である。それは昨年に於ける彼の組閣が、ドイツ政局行詰りの最後の打開策として、暫定的に現はれてきたものであつたからである。かやうな見方からすれば、一月三十日に於けるシュライヘルの退却、並に彼が僅々五十六日に過ぎないドイツ内閣創始以來の最大短命内閣の宰相に過ぎなかつたこと云ふことは、豫め定められてゐた事實であつて、決して彼の政治に於ける無能力さ、彼のドイツ政局に於ける無勢力さからきてゐるのではないのである。

七月三十一日の總選舉によつて、議會の地盤を作るこゝのできなかつたバアペン内閣は、九月議會の閉會に不信任の決議をうけて、再び總選舉に臨まねばならなかつた。そして十一月六日行はれた總選舉には、與黨の進出を見るこゝができたにも係らず、その基礎は未だ餘りに薄弱であつて、議會的勢力さなすに足りなかつた。然も來るべき選舉後の議會の召集は特に一ヶ月の後に迫つてゐる。

二度議會を解散し、然も更に將來に向つて議會的勢力の上に於て何らの保障をも見出し得なかつたバアペン内閣は、ここに猪突主義を抛棄して、議會的諸勢力のうちに政府の有力な協力者を見出さざるを得なくなつた。彼らに最も近いものは、ナチスミ中央黨であるが、何れも協力を拒否した。かくして、遂に方策を失つたバアペン

が、政權をなげ出したのが十一月十七日であつた。

ここに於て後繼内閣の首班者として選ばれたのが、多少の衰頹は示したけれども、未だ議會の第一黨たるナチスの首領ヒトラーであつたのは當然である。ヒトラーが初めて大統領に招かれて、後繼内閣についての意見を求められたのが、十一月十九日である。しかしナチスの組閣には、大統領から六ヶしい條件が附け加へられた。

この條件の内容は、各種の誤解を避けるため、後に至つて、特に大統領秘書官 (Staatssekretär) Dr. Meisner によつて公に發表された。それは次の二條件から成つてゐる。

(一) 政策問題について。經濟政策を確定すること、聯邦と支分國との二元主義に復歸せざること、及び憲法第四十八條の大統領獨裁權の制限に亘ることのなきこと。

(二) 人事關係について。閣員の最終決定權を大統領に保留すること、ミクに外務大臣と軍務大臣の人は、大統領の決定に一任すること、何んミなれば外務大臣は、ドイツ現下の國際的地位に基き、特別の考慮を必要とし、從來の政策の變更を避ける必要があり、また軍務大臣については、元帥としての大統領の權能に基き當然要求し得るミところであるからだミ云ふにあつた。*

ヒトラーは二十一日まで回答を保留して歸つたが、二十一日に至るも何らの回答を齎さないで、徒らに不安の

うちに時日を遷延しつゝあるので、二十二日大統領はマイスナアをして、ヒトラーの回答を促さしめたところ、漸く翌二十三日に至つて回答をよこした。

この回答によれば、ヒトラーは、無條件で組閣を委任されたきこみ、及び議會解散權を賦與されたきこみの二つの要求をなしたに外ならなかつた。

もみよりこの回答は、大統領から直ちに拒絶されたが、その拒絶の理由は、この二つの要求を容れるこみが、ナチスの一黨主義政權を認めるこみであり、それは却つて各勢力の抗爭を激化する惧があるからであるこみ云ふにあつた。***

かくしてヒトラーが政權の好機を取逃したこみ云ふことは、黨内分裂の危機を一層促進せしめた。このナチス黨内に於ける焦燥と紛糾とは、外面的に回答の遷延となり、徒らに政局不安を助長するものであるこみ云ふ、世論の非難を生んだ。ナチス側ではこの責任を回避するために、大統領のつけた條件の不當を難詰するための理屈として、徒らに大統領内閣と議會内閣との概念的相違に關する冗長な論争を繰返した。門前まできた政權を取逃さねばならぬナチス黨員の焦燥の氣持がそこによく窺はれてゐるわけである。

この時、ヒトラー内閣が何故に失敗に終つたか？ それは決して大統領の條件が、一月三十日のそれに比して

特に苛酷であつたからではない。一にたゞハルツブルグ戦線の成立の望が、全く缺けてゐたこと、ヒトラーの妥協的準備ができてゐなかつたことによるのである。

大統領の條件によれば、ヒトラーは議會的地盤のための交渉を、可能性のある近接せる他黨を行ふべきであるにも係らず、何らこれを行つた形跡がなかつた。これは黨内の方針の不一致に原因するのである。ヒトラーの回答の當日に至り、ハルツブルグ戦線論が強く現はれてきた。そしてこの方面にヒトラーを動かさうとして努力したのが、ナチス準黨員前國銀總裁シャハト (Schacht) であつた。彼はナチス内部の調停に努めると共に、ヒトラーとフリーゲンベルグとの會見を計畫したのであつたが、何れも不成功に終つた。*** 十一月二十日にはナチスの領袖フリーリングがフリーゲンベルグに會見を申込んでゐるが、これも拒絶された。***

のみならず當然、ハルツブルグ戦線の一員たるべき『シュタールヘルム』の機關紙にも、反對論がかかげられた。*** すなはちこれらの民族主義諸黨は、むしろヒトラーの、自分たちの方に向つての、方向轉換を期待してゐたに過ぎべきであらう。フリーゲンベルグ系の諸新聞紙は、すでに十一月二十日以前に、ヒトラーがシユライヘル内閣を支持するに云ふ風説を流布しつつあつた。***

ヒトラーの單獨内閣には、大統領の反對があり、ハルツブルグ戦線は未だ成熟するに至らなかつた。そしてバ

アペンの再起については、大統領の周圍に實業界に反對があつた。*****

* "Berliner Tageblatt," 25. Morgen, Nov. 1932.

** ヒトラーの回答内容と大統領拒否の理由とは、特に政府の官報(十一月二十五日)に發表された。

*** "Berliner Tageblatt," 23. Nov. 1932.

**** "Berliner Tageblatt," 21. Abend, Nov. 1932.

***** "Kreuz-Zeitung" (Siehe! "Berliner Tageblatt," 24. Nov. 1932.)

***** "Berliner Tageblatt," 19. Abend Nov. 1932.

***** "Berliner Tageblatt," 27. Nov. 1932.

かやうにして、バアペン内閣崩壊後の政局が全く行詰つてしまつたときに、初めてシュライヘル内閣の計畫が初められたことを知らねばならぬ。

シュライヘル内閣が、風説として傳へられるやうになつたのが、十一月二十七日であつたが、實際にその組閣運動の初められたのは、漸く十一月二十九日であつた。バアペン辭退後、實に十二日目である。但し上に述べたやうに、フーゲンベルグ系の新聞のみは、すでに十日も前から、シュライヘル内閣説を流布しつつあつた。しかしこれは寧ろシュライヘル内閣の出現を希望し、それによつてバアペン内閣の壽命を内容的に持続せしめやうと

するフーゲンベルグ派の意思を示すものであつたことは、彼らがシュライヘルの組閣運動を直ちに支持してゐることは、シュライヘルがこの風説を否認してゐることによつて知られる。＊
シュライヘルの組閣は、次のごみき各方面との折衝を以つて初められた。

(一) 資本家との會見。これは政策の諒解を求めるためであらう。

(二) Gereke への會見。これは “Arbeitsbeschaffungskommissar” (失業省大臣) にするための交渉であつた。

(三) Gayl への會見。これは内相を辭せしむるための交渉。

(四) Breitscheid への會見。これは正月まで休戦の妥協を行ふための、社會民主黨への交渉であつた。

(五) Strasser 及び Frick への會見。これは間接にヒトラーを囚へるためであつたが、不調に終つた。しかしナチスはこのごみき十一月總選舉の黨費の後仕末がつかないほど窮乏してをり、新選舉を好まないごみが明かであつて、正月までの休戦の見透しは、シュライヘルにもついたやうである。

(六) Hugenberg への會見は、豫定の如く成功であつた。

(七) Otto すなはち『キリスト教勞動組合』の領袖への會見。これは中央黨方面に對する働きかけでもあつたが、オットーはバアペン内閣の勞働政策の修正を要求した。

(八) 『ドイツ労働総同盟』 (Allgemeine Deutsche Gewerkschaftsbund) の首領も會見したが、同じく労働政策の諒解を求めるためであつた。

右のうちで、最も問題となつたことは、社會民主黨のフライトシャイドの回答であつた。その回答の内容は、二通りの矛盾する内容を以つて報道された。一は休戦を拒否したとし、他は一月十日までの休戦を承諾したと云ふのであつて、後説は主として議會方面で喧傳されただけ、その方が事實であつた。

またフーゲンベルグの支持し、シュライヘルのナチスへの働きかけから、當時すでに『民族主義戰線統一』 (Nationale Konzentration) 運動が傳へられ出した。しかもそれによれば、ナチスミフーゲンベルグの『ドイツ民族黨』 (Deutschnationale) と『ドイツ國民黨』 (Deutsche Volkspartei) の三黨の結合を促進し、恰も年末をひかえてゐるこの際、一月十日まで議會の休戦を成立せしめ、この間に準備を完了しつつ、政權をヒトラーに譲渡せんがために當分シュライヘルの中間内閣を作らうとしてゐるのが、大統領の意思である云ふのである。*
これは當時單なる風説として傳へられたに過ぎなかつたけれども、その後の政局は、この風説の内容通りに發展してきたことを思へば、これを單なる風説として軽く見ることはできないのである。

* 二十一日の夕刊紙上で、シュライヘルは軍務省の名に於て、彼が政權運動に何ら干與してゐないことを聲明した。(Berliner

"Tagblatt" 21. Abend, Nov. 1932.) 同種の風評に對して、シュライヘルは常に、神經過敏に釋明を行ふことを忘れない。恐らくこれはドイツ軍閥の立場として國際關係を顧慮してゐらう。

米米 "Berliner Tageblatt" 28. Abend, u. 29. Nov. 1932.

かくして組閣の準備が成立したが、しかしこの準備は決して内閣の永續性を前提して行はれたものではなく、單に當面の危機を免れ、共產黨のみが徒らに膨大する不安なる選舉の反覆を避けんがために、もつゝ強大なる大統領内閣——同時に民族主義統一戦線の上に確立せられたる政權を創造せんがための中間内閣として準備せられたことが明瞭である。そしてその壽命も一月十日まで云ふことで、議會の諸黨に對する休戦の諒解が求められてゐた。故に一月三十日の政變は、すでにこの時に豫定せられてゐたプログラムに外ならなかつたのであつて、ただ後繼内閣の準備未了のため、豫定が一月十日より二十日間延びた云ふに過ぎない。そしてこの豫定が二十日間延びた云ふことは、主としてナチス黨内に、妥協によらざる純正のヒトラー内閣を作り出さんとする要求が、強く動いてゐたためであつたを見ることができる。

十二月二日夕刊紙上に、漸くシュライヘル内閣の成立が豫報され、四日正式にその成立を見たのである。それに引つづいて、一月十日までの議會の休會案の討議が始り、すでに述べた如く、十二月二十日それは確定したの

である。強氣を見せてゐたナチスも、豫定の如く、休會案に賛成した。

この時遂に、ナチス黨内の所謂『ヒトラー反對の御家騒動』(Palastrevolution gegen Hitler) が起つた。これより先、ヒトラーを初め (Joebels, Frick, Göring, Strasser) らの巨頭會議がワイマールに於て、極秘裡に行はれた、もこよりナチスの機關紙はこの事實を否認してゐるほぎで、内容は不明であつた。

しかるに十二月九日の夕刊新聞は一齊に、Strasser, Feder 及び Frick の脱退を傳へるに至つた。その理由としては、黨費問題、政策問題、組閣失敗問題なきが傳へられてゐるが、フェーダアの脱退聲明は、明白に政策に對するヒトラーの不忠實を責めてゐる。ナチスの膨脹は、却つてその原始的政黨綱領の遂行からの轉落と反比例してゐるこゝが、ここに如實に語られてゐる。したがつて、この分裂は、却つてハルツブルグ戦線の可能性を促進したものであると考へられる。それは勢力關係の上のみでない。各民族主義黨に對する政策上理論上の對立的意義を薄弱にし、彼れらを互に接近せしむる便宜を提供した。勢力關係の上では、更に十一月十三日に於けるリュベック外六都市、及び十二月四日に於けるテューリンゲン地方の選舉、及び同十八日のアルスドルフ市の選舉に於いて、何れも著しいナチスの敗北が認められた。十六日にはナチス黨の組織が改められ、ヒトラー獨裁の傾向が著しくされたが、それは脱退に伴ふ善後的處置に外ならなかつた。*

かくしてナチスの態度が軟化して行きハルツブルグ戦線の可能性が益々著しくなり、中間内閣の存在が無意味でなかつたことが次第に認められてきた。

かやうにして政局は、一九三三年一月十日を期待しつつ、不安のうちに、クリスマス前の休養に入つたのである。
* "Berliner Tageblatt," 9. Abend, 16. Dez.; 30. Nov. 1932. シュトラアセルは、形式上、三週間の休養を命ぜられたことになつてゐる。フリックは間もなく慰撫されて復歸した。機關紙は分裂の事實を否認してゐる。

五、政局に現はれた諸勢力の關係

十二月四日のシュライヘル内閣は、中間内閣として成立せるものであつた。従つて一月三十日の政變は、中間内閣の役割の完了を意味する以外に、何らより以上の意義はなかつた。しかも十一月バアベン敗退以來のハルツブルグ戦線内閣の創建に云ふ、政府製作者たちの意圖は、遂に大部分の成功をここにかち得たのである。その實現の難關が、ヒトラア及びその一黨の態度の上に存在してゐたことは（議會に於ける第一黨たるの重さからして）云ふまでもないが、しかしここに所謂或程度の成功をかち得た政府製作者が、決してヒトラアでなかつたことは確實である。

ヒトラーはむしろその敗北者であつた。——換言すれば政府製作者の劃策に基いて、躍らざるを得なくされた道化役者に過ぎなかつた云へるのである。

ここに於て所謂成功をから得た政府製作者は何者であつたか？ 要するにそれは官僚であつたか、軍閥であつたか、或はその兩者であつたか？

一九三三年二月三日『マンチェスタア・ガアヂアン』週刊紙は卷頭に『ヒトラー』と題する論評をかけた、次の如く論じた。

『この際ヒトラーの政權把握に云ふことよりも、もつと驚くべきことは……フーゲンベルグ氏の勝利である。そこにかやうに多くの同志を集め得た彼について考へるならば、權力はむしろナチスよりも『ドイツ民族黨』に歸したと云ひ得る。新内閣にはシュトラアセルや…… Röhm がゐない。ゲッベルスすら缺けてゐる……ヒトラー・フーゲンベルグ・バアペン政府は、恰もブリューニングが倒されたと傳へられるシュライヘル將軍の陰謀と同じやうな方法によつて政權掌握にまで押し出された (engineered into power)。』*

しかるに新内閣が形式上、ヒトラーを首班させざるを得なかつた云ふことは、如何？

『ヒトラーに對するヒンデンブルグの反感にも係らず、なほヒトラーが宰相となることを、何故ヒンデンブル

グが、最後に至つて承認せざるを得なかつたかは、恐らく決して充分には明瞭にされ得ないであらう。が恐らくその主因ミ目すべきものは、民族主義者たちのハルツブルグ戦線を再興せんミする決意であつて、そしてこのこゝが、ヒトラーの宰相を認むるこゝになしには、不可能であつたミ云ふこゝに歸するであらう。』*米
と同紙は説明してゐる。

* "Manchester Guardian Weekly," Feb. 3, 1933, P.32

*米 Op. Cit. P.84.

このマンチェスタールガアデアン紙の記述も、問題の核心を依然ミして不明のまゝに残してゐる。新内閣の製作者、すなはちこの際、ヒンデンブルグを動かして、その最後決定に影響を與へた進言者は、バアペンかシュライヘルか？ 或はまた隠れたる第三者か？

バアペンは新内閣に於ける目付役であり、ヒンデンブルグの意思の代行者である。故に彼は形式上は、少くも新内閣の實勢力の中心に立つてゐるやうに見える。しかし彼は果して、ドイツの政界から幾何の勢力ミ信任ミを認められてゐるか？ この點については甚しく疑問がある。

第一に、彼が、昨夏、ヒンデンブルグの信任を得て、突如宰相の印綬を帯び、初めて、ドイツ政界の表面に乗

り出してきたときに、人々は決して、彼の人物ミ手腕ミ勢力ミに、多くの信任を與へなかつた。彼はそれまで『中央黨』の機關紙『ゲルマニア』の大株主の一人であるミ云ふに過ぎなかつた。これに反し、この内閣が現實に軍務相シュライヘルの指導下に置かれることは、却つて何人も承認したところである。これに關係して、シュライヘルの政變に於ける隱謀が更に廣く傳へらるるに至つた。

そしてバアペン内閣は半ケ年にして倒れ、その後もバアペンの大統領に對する評番は、決してよいものではないミ傳へられた。ヒンデンブルグの彼への信任は、むしろシュライヘルへの信任であつた。一月三十日の政變に至るまでのバアペンの行動についても、常にシュライヘルとの緊密な關係に於て行はれてゐるこゝが認められる。そのバアペンを新内閣の製造者として、單純に、シュライヘルに向つて對立せしめるこゝは、意味をなさない。

しからばもつミ外に、考へ得られる人物があるであらうか？ここに於て、昨年五月政變の内情に、少しく觸れねばならぬ必要が起つてくる。

昨年五月ブリュニング内閣倒壞の直後、『中央黨』の議員シュライベル教授 (Dr. Schreiber) は、『ブリュニングーヒトラーシュライヘル』ミ題する小冊子を、知友の間に配布した。その要旨は、シュライヘルを中心

ミする軍閥フロンド (Fronde) が暗々裡に成立しつつあつたが、封建的官僚の政治團體『ドイツ』ヘレンクラブ』 (Deutsche Herrenklub) の勢力を利用しつつ策動するに至つた。彼らの策動の直接的原因是は、大統領選挙及び間近きローザンヌ會議への對策ミして、ブリューニング内閣の強行したナチスのSS隊及びSA隊に對する禁遏であつた。その結果として内相グリュウナー將軍の (Groener) の辭職となり、政局は遂に内閣瓦壞にまで導かれたが、バアベンも亦その策謀によつて中央に乗り出したものであるミ云ふにあつた。*

かやうにドイツ政局の現勢力ミして、先づ私共の考へねばならないものは、軍閥の外に、官僚團體たる『ドイツ』ヘレンクラブ』の存在することである。

しかるにこの内閣改造劇の筋書は、以上の内容のみに止らなかつた。それは『ヘレンクラブ』に屬する人物自身によつて語られてゐる今一つの事實があるからである。

それはその當時、今一つの風説がひろまつてゐたミ云ふのである。それによれば、大統領が選挙後の休養のために、郷里東プロシア州ノイデック城 (Schloss Neudeck) の友人の下に滞在した事實を中心とするもので、この休養は實際はフロンドの策謀に基くものであつて、ブリューニングの大地主に不利な第五緊急法案に現はれた東方匡救政策に不満を有するこの地方の大地主をして、ブリューニング倒壞に就て大統領に説かしめやうとするた

めであつたミ云ふのである。そしてヒンデンブルグがノイデックからベルリンに歸つたのが、事實上、五月二十九日の日曜日であつて、同日早速ブリューニングの提出した右の緊急法案が、大統領の拒否するところとなり、内閣瓦壊に導かれた。米米　そしてパアペン後繼内閣は、このブリューニングの法案に代る、大地主に有利な、東方匡救法案を實施するに至つた。

これらはみな、シュライヘル及びヘレンクラブの策謀を傳へてゐる風説であるが、ヘレンクラブの關係は、必ずしも明瞭でない。しからばヘレンクラブミは何ものであるか？

『ドイツヘレンクラブ』ミ云ふのは、一月三十日の政變にも現れてきたアルベンスレーベンノイガッテルスレーベン伯 (Graf Hans Bodo von Alvensleben-Neugatterleben) を中心として、一九二三年十一月から結ばれてゐたイギリス式の政治クラブであつて、最初の構成員は封建的な貴族が大多數を占めてゐたが、後には次第に實務者も加はつてきた。今日ではシュレジユン・北西ザクゼン・マゲデブルグ・テューリンゲン・中部ライン・シュツットガルト・ケルン・デュッセルドルフ・エッセン・ハンノーフェル・オスナブルック・メクレンブルグ・ハムブルグ・アウグスブルグ・ドレスデンなどのヘレンクラブがあつて、全国的に勢力を張つてゐる。その目的は政黨の如く直接に政治に干與するものではなく、たゞ一定の政治意見を有する者の自由な集會であるが、大體に

於て、政治的には保守的な上層社會を代表し、宗教的にはキリスト教國家を實現せんとする保守的なキリスト教主義に立つてゐるものである。***

このヘレンクラブがブリュネニング内閣打倒に關係してゐたと云ふ風説の起りは、このクラブの首領株の一人であるグライヘン侯ハインリッヒ (Heinrich, Freiherr von Gleichen) の主催してゐる保守主義の政治週刊雜誌『リング』(Ring) が、バアペン内閣の成立を、他の報道機關に先んじて餘りに早くすつばぬいてゐた——即ち非常に早く知つてゐた云ふこと、及びバアペン内閣の成立が、未曾有の急速度を以つて行はれた(五月二十九日にブリュネニングの辭表呈出があり、六月二日バアペン内閣の閣員が公表された)云ふことに、原因してゐるのである。

この點に關してヘレンクラブ員たる著者ワルター・シヨテは、次のやうに辨明してゐる。すなはちハインリッヒ侯は、元來政治的にブリュネニングと對立してゐた。のみならずヘレンクラブの集會では、屢々ブリュネニング内閣の政策が論議されてゐた。その上彼には更に、ブリュネニング内閣の有力な閣員との連絡もあつた。連絡があつたのみでなく、ブリュネニング自身一九一九年、ハインリッヒ公によつて創設された『六月クラブ』(Friedrich-Klub)に關係があつた。かやうな點が、彼をして早耳たらしめた所以である。しかも新内閣の支持者たるフ

ーゲンベルグは、屢々ヘレンクラブを保守主義者又は不安な油断のならぬ連中と誹謗してゐた位であるから、今更かやうな誹謗者の内閣を支持する筈がないではないかと云ふのである。***

しかし私共も此の辯明には、そのまま首肯するだけの充分な根拠を持つてゐない。ヘレンクラブの政治理論及び社會的立場は、政權製造者たる風説を生むに足る内容を備へてゐる。

* Walther Schotte, Das Kabinett Papen-Schleicher-Gayl, Leipzig 1932, S. 5.

** a. a. O. S. 7.

*** a. a. O. SS. 17—18 (Vgl. Paul Herre, Politisches Handwörterbuch.)

**** a. a. O. SS. 16—17.

これに反してシュライヘルは、疑ふべくもないミワルター・シヨテは主張するのである。何んぞなれば、シュライヘルによるバアペン内閣の策謀は、甚だ久しい準備を有するものであつたからである。例へば一九三二年二月十四日の“Dortmunder Generalanzeiger”紙に發表された Kurt Reibnitz のシュライヘルの策動に関する論文のごときは、次のごとく記してゐた。

『一九三〇年三月、正に崩壞の危機に立つてゐるヘルマン・ミュラー内閣に、大統領が議會解散權を賦與せん

ましたとき、軍務相グリュウナアがシュライヘルの指令に基き、大統領に向つて、社會民主黨の政權が排除されるべきことを條件としてのみ、大統領の緊急令によつて保障せらるべき内閣の下に、責任を負ふことができない抗議した。』*

かくして社會民主黨の政權が驅逐され、中央黨の政權が、ブルューニングの下に作り出されたことは、シュライヘル及び彼を環る軍閥の政治的干與を語るものであつた。

故にブルューニング内閣は、シュライヘルの推すところのものであつたが、一九三一年秋より兩者の關係が悪化した。その原因は、シュライヘルがナチスミ提供せんとする策謀を廻らしてゐるとき、却つてブルューニングに對する民族主義者の統一戦線（ハルトツブルグ戦線）が成立した（十月十一日）からである。

しかしなほシュライヘルが、ブルューニングを支持してゐたのは、ただブルューニングの外交政策を支持するためであつた。ここに於てシュライヘルは、軍務大臣グリュウナアを内務大臣に移動せしむることによつて、ハルトツブルグ戦線への對策をねつた。ハルトツブルグ戦線は、大統領改選に於ける協調の失敗に基いて、再び分裂したけれども、遂にナチスSA隊及びSS隊彈壓が中央黨の政策に基いて行はれたので、シュライヘルは、ブルューニングから離れざるを得なくなつた。ナチス彈壓について、その後シュライヘルが、友人に向つて、それはブルューニ

ング内閣最大の失敗であつたミ語つたミ云ふことであるが、果して然らばシュライヘルの本意は、大體推察に難くない。

以上は、主としてワルター・ショッテの述ぶるところである。かくしてシュライヘルは、バアペン内閣を製造し、みづから軍務大臣として表面に現れたことは、國軍ミハルツブルグ戦線ミの間に緊密なる聯携を作り出さんとする彼の宿望が、比較的難事業であつて、彼みづからの出馬を必要としたからであるミ、ショッテは結ぶのである。

＊ Walther Schotte, S. 20.

＊ a. a. O. SS. 20—24.

元來、バアペンは、シュライヘルを通じてのみ、ヒンデンブルグの信任を有してゐるに過ぎない。これに反しシュライヘルは、すでに第三近衛聯隊 (Garderegiment) に於て、ヒンデンブルグの部下としての厚い信任をうけてゐた。彼が參謀總長の椅子について以來、彼の邸宅には各方面の有力者が蝟集した。しかるにバアペンに對する信任は、同じやうな軍部出身ではあつても、彼が軍人たるが故ではない。彼が中央黨に黨席を有する議員であり乍ら、中央黨の政見よりも、遙に保守的な政見を持ち、むしろヘレンクラブあたりの政見に、最も近いものがあつたからである。＊

バアペン内閣には、その外に内相としてガイル侯 (Freiherr von Gayl) が加はつてゐた。彼は東プロシア人であり、法學教育を受けた人であるが、地主ではなく、東プロシア土地會社の支配人であつて、植民事業の経験者である。ナチスの支持者でもある。ノイラートは、ウユルテムベルグの出身であるが、帝政時代の教養を受けた官僚的外交官である。大藏大臣クロージック伯は、ヘレンクラブの首領アルヴェンスレーベンの従兄弟であつて、エルベ地方の古い貴族の出身である。交通大臣となつたエルツリューベナツハ侯も別に家督財産は持つてゐないが、モーゼル地方の古い貴族である。また食料大臣ブラオン侯 (Freiherr von Braun) は、東プロシアの封建大名の息子で、下シュレジエン地方に牧場を有してゐる純粹のプロシアユンカアである。*米

* a. a. O. Schotte, SS. 24—29.

*米 a. a. O. SS. 79—81.

かやうにバアペン内閣の顔ぶれを見るに、その政策の方向は、甚だ明瞭であつて、極めて保守的な貴族的要素によつて固められ、近代的工業的勢力よりもむしろ農業的勢力を基礎としてゐるこゝが知られる。

十二月に成立したシュライヘル内閣は、その政策の進歩的なる點に於て、社會民主黨の支持を受けたが、それはバアペン内閣の政策を轉換する必要が迫つてゐるからであらう。そしてシュライヘル内閣によつて轉換された

進歩的な政策は、一面に社實民主黨の支持をうけたけれども、他面に産業資本家と大地主との反抗をうけた。そして遂に瓦壞へ導かれたけれども、しかしそれは必ずしも、シュライヘルにまつて主要なる問題ではなかつたであらう。彼はその間に、ハルツブルグ戦線内閣を作りあげる困難なる事業に、成功したからである。

かやうな見解から來るころの結論は結局、當時に於ける政府製造の中心人物が、シュライヘル自身であつて『ヘレンクラブ』その他の官僚的勢力は、むしろ助勢的要素として、これに何らかの影響を與へてゐたのではあるまいか云ふことに、歸納されるのである。しからば、一月三十日の政變はさうであつたか？

六、結 論

夫れぞれ一九三二年五月及び十二月の政變と一九三三年一月三十日の政變との、表面に動いてゐた勢力の相違は、ハルツブルグ戦線の存在に否きである。前兩回の政變にはその存在を見ず、一月三十日の政變に於て、初めてそれが現はれてきた。そしてハルツブルグ戦線を作り、その上に政權を安置せんことが、シュライヘルの宿望であつたミすれば、一月三十日の政變に於けるシュライヘル將軍の重さは、到底否定され得ない。彼はこ

の宿望を實現するためにのみ、中間内閣の首班にまでなり、そしてその目的を達したとすれば、一月三十日の政變は、形式上彼の敗退ではあるが、實際上は彼の勝利であること云ひ得る。

しかしその外に、如何なる勢力が動いてゐたか？　そこには見逃すことのできない二つの勢力が存在してゐた。一は公に進出してきたフトゲンベルグとゼルデ、ミクにフーゲンベルグである。彼はドイツ報道機關のトラストの上に君臨し、ドイツ産業資本界に押しも押されもしない地位を占めてゐる。然し彼の政治意見は保守的民衆主義である。この見地ミこの勢力ミに據つて、彼はゼルデの下にある在郷軍人團ミ共に、新政府の經濟、社會政策の中軸を掌握してゐる。こゝに私共は近代的資本の勢力の政治的進出を見る。

今一つは僅に隠見するヘレンクラブの動き、又はこれミ同系統の政府部内に於ける現實的な勢力である。この勢力は、過去數年間のドイツ政局の裏面史を繙くことによつて、漸く嗅ぎ出されることころの存在であつて、一月三十日の政變には、僅に首領アルペンスレーベンが動いたこと云ふ小さい記事が、表面には、報道されただけであつたけれども、シュライヘルの政治的勢力の同伴者として、彼らが或る勢力を振つてゐたことは、推測に難くない。

ヘレンクラブの勢力は、その農業的大地主的封建的官僚的基礎の上に求められねばならない。従つてそれは、

その政治的政綱に於て、フーゲンベルグらの保守的民族主義に近いけれども、決して同じものではない。且つまた彼らミ一身同體であるものでもないことは、先に述べたやうに、ワルター・シヨットが語つてゐる。ヘレンクラブミ・フーゲンベルグミの對立は、農業的土地所有ミ近代の産業資本ミの對立である。此兩者はシュライヘル・ヒンデンブルグ・バアペンを媒介ミして、初めて提携するを得たけれども、それなしに提携し得たかは疑はしい。しかしそれは事實上、バアペン内閣に於て、或程度まで出來あがつてゐた。ミくに、東方匡救問題を中心ミする産業ミ農業ミの抗爭悪化の際に、兩者の提携を實現するミ云ふことは、事實上何れかにその指導權を與へるこゝによつてのみ可能である。バアペン内閣は、これをむしろ農業派に與へた傾向があるが、そのために甚しく資本家の不評を買つた。ヒトラー内閣は、その支配權をフーゲンベルグに讓渡し、農業的官僚ヘレンクラブ系がこれに讓歩するこゝによつて、初めて可能ミなつたものであらう。

その他には、ヒトラーのファシズムが存在するのみである。しかしこのファシヨ黨は、その中心的ファシヨ的社會經濟政策を、全く官僚ミ資本家ミに讓渡してしまつて、共產黨彈壓のための警察力ミ、宰相と稱する虛名を得たに止つた。かくして初めてハルツアルグ戰線の可能性が成就したが、かくもヒトラーが、殆んどその立場の大半を敵に渡して、徒らに議會の第一黨を擁してゐるに過ぎないまでに讓歩ミ妥協ミを迫られたミ云ふこゝ

は、ファッシズムの必然的宿命であるとも云へやう。この宿命にまで、ヒトラーを追ひこむために、バアベン・シュライヘルの中間的軍閥的獨裁政權が必要とされた。ヒトラーはこの軍閥政權の彈壓の下に、次第に衰頽を初め、黨内分裂を惹起し、遂に主義を完全に拋棄して、虛名のみを保持するこゝまなつたのである。ヒトラー及びその黨員はこの妥協的政權を利用して、他日の飛躍を夢見てゐるであらうが、この政權獲得は、一九二二年十月に於けるムツリーニの政權獲得と、その意義を甚しく異にするのである。

かくのごとくして成立せるヒトラー内閣をめぐるドイツ政局は、すでに次のやうな段階にまで進んだ。

(一) 議會政治から脱却し、ヒンデンブルグをめぐる宮廷政治へ向つて發展した。したがつて政治は再び封建的な陰謀政治となる。

(二) ヒンデンブルグをめぐる軍閥官僚の政治的指導となる。就中、軍閥の指導の方がはるかに官僚の指導よりも強くなつた。

(三) 資本家は政黨を捨てて、宮廷的勢力に結合してきた。従つてそれは大資本のみに許されるこゝまで、大資本の政治的指導が著しくなつた。

(四) 政治上に於ける農業的大資本と近代産業資本との抗爭より、次第に農業的大資本に對する近代産業資

本の制覇が確立してきた。

(五) 政治は従つて獨裁化する。君主獨裁制への發展の可能性が濃厚になる。

かやうな政治的階段は、純正な意味でのファツシズムの存在する國では、どこでも或る時代には到達するであらう段階である。然し軍閥自體の政權が現はれるやうな國は、むしろ秩序的に社會的により劣等なる國である。軍閥そのものの本質として、政權の背後に實力的な指導を行ふこゝが本則である。そしてかやうなファツシズムの勢力成熟の可能性ある國は、また同時に官僚と軍閥との支配が存在し得る國であつて、軍閥官僚の勢力のない國には、またファツシズムの可能性が少く、従つてその政治的發展は、獨裁政治の過程に於ても、もつと異なる形態を示すものであらうこゝを附言して置きたい。

附記。まだ一月三十日の政變を論じた外國の雜誌が殆んど届かない。資料は新聞によるの外はなかつた。急に單時日の中にもこめたものであるから、後で修正したい點が生ずるかも知れない。(三月十七日完稿)

訂正。『テークリップヘルンドシヨウ』は『ドイツ國民黨』系の新聞に非ず、『キリスト社會奉仕黨』の準機關紙である。しかし立場に於ては、さして變りはない。此政黨は一九二九年フーゲンベルグの政黨から分裂したものである。